エイズとうわさ
―うわさへの接触，うわさの伝達を促進する要因について―

川 上 善 郎

The Acceptance and Transmission of Rumors about AIDS

Yoshiro Kawakami

This paper explored rumor acceptance and transmisson as a function of anxiety and uncertainty about AIDS, the importance of AIDS for the subjects, and the credulity of the rumor itself.

The research by mail method was conducted in the Tokyo area in March 1993. Subjects were selected from those registered with a research company, Asahi Elle to achieve diversity in sex and age. Two hundred and twenty questionnaire were returned, 115 of which were male and 105 of which were female. The data was analyzed by discriminant analysis in order to discriminate three groups, who had not heard any rumors, those who had heard rumors, but did not transmit them, and those who transmitted them to others.

1. Uncertainty about AIDS was a strong predictor of receiving rumors and transmitting them. The subjects who had a feeling of uncertainty about AIDS, tended to receive many rumors and transmit them to others.

2. The importance of AIDS to the subjects was also significant. The subjects who were seriously concerned with AIDS were not apt to receive rumors and transmit them to others.

3. Although anxiety about AIDS was hypothesized as an essential predictors, anxiety was not found to have any significant relations to rumor acceptance and transmission.

4. The credulity of the rumor positively related to acceptance and transmission.

5. People who did not believe the information which flew through personal networks did not transmit the rumors after receiving them.

注：本研究は，93年度情報学部共同研究「社会不安とうわさ」（川上善郎，田中敦），94年度情報学部共同研究「社会不安とうわさ（継続）」（川上善郎，綿井雅康）の一貫として行われた。

目　的

[エイズと情報]

AIDS（後天性免疫不全症候群）は，HIV ウィルス感染によって生じる症候群をあらわした言葉であり医学的な用語である。しかし，AIDS は，医学的な用語であるにとどまらず，きわめて社会的な問題を示す用語になっている。AIDS が医学問題から社会問題の様相を呈したのは，86年長野県のフィリッピン女性の HIV 陽性解明，87年神戸の女性患者の確認，さらに高知県でのエイズ感染者の出産などを契機としてだった。それまでにも，血液製剤による感染と男性同性愛患者の感染が伝えられていたが，異性間感染の可能性が現実のものとして提示されたとき，わが国でも「エイズパニック」と呼ばれる社会状況が現われたのである。その後，エイズ研究は学問的には多くの進歩を示したと言われるが，決定的なエイズの治療薬，治療方法が未だ解明されていない状態である。その一方でエイズ感染者は確実に増大しており，エイズ感染の危険性は年々増大しているという認識が一般的である。

このような状況にあって，エイズとエイズ患者に対する差別意識の顕在化と同時に，エイズ感染者らの献身的な行為によって差別解消に向けた社会運動も確実に進展しており，そのための啓蒙活動も盛んに行われている。同時に，差別解消とエイズ拡大の阻止を目的として，エイズ知識や情報，すなわちエイズ感染実態，エイズ感染の経路，さらに感染予防法などについて情報提供が官民一体となって各種のメディアを通じて積極的に行われ，一定の成果をあげている（注１）。

しかし，エイズ治療のための医学的な方策が確定していない現在では，これらの情報提供は，個々人の意識・行動の変容を目的としたものにならざるをえないという限界がある。純粋な科学・医学情報の提供と言うよりは，政策的意図をもった情報の提供であり，判明しているすべての情報が必ずしも公開されていないのではないかという疑念もついて回る。また，性行動にかかわる意識と行動の問題であり，既存の性道徳や性教育の内容と矛盾する部分を生じたり，他方では解放的・革新的な性意識と対立する部分を持つなど，価値中立的な情報としてとらえにくい性質をも持っている。

このような公的なルートを通した情報の流れとは別に，さまざまな情報がそれら以外のルートを流通している。例えば，エイズの伝染経路についても，エイズは蚊によって伝染する，プールでエイズに感染する，歯ブラシを共有すると感染する，キスで感染する‥などの話が，公的な機関の否定にもかかわらず，口づたえで伝播している（注２）。エイズに関しては，未解明な部分が多く，人々の疑問や不安に十分に答えられない部分がまだまだ多い。これらの疑問や不安への回答を，公的なルートとは別にマスメディアや人々の口づたえの情報からえようとしている状況にある。

身近に現実のエイズ患者が（顕在化して）いない現状であり，患者との身近な接触を通してエイズに関する認識を直接的に形成することはほとんどない。エイズに関する認識は，パーソナルメディアを含めた各種のメディアを流れる社会情報によって形成される。また，社会情報によってのみ人々の意識と行動も変化する。このような意味で，人々のエイズ観形成のプロセスを解明し，どのような社会情報が人々のエイズ観形成に影響力を持つかを明らかにすることが，エイズに対する差別意識の解消とエイズ感染の拡大を防ぐために緊急に要請されていると言えるだろう。

うわさとニュースの研究会は，1993年３月に「エイズとうわさ」の調査（注３）を実施した。この調査は，上に述べたような問題意識をもって，個人のエイズ観と社会情報との関係を分析す

る目的で行われた。この中で取り上げられたうわさのひとつは，「エイズの世界にようこそ」（注4）というものである。このうわさを題材に，このうわさのもっともらしさ，身近さ，うわさの解釈，エイズ対処行動の変容，うわさとの接触経路を，またエイズ全般のうわさについて接触経路，伝達先と範囲，各種のうわさと接触状況などが調査された。同時に，対象者のエイズ知識，エイズ情報の入手経路およびメディア別信頼度，エイズへの対処可能性，エイズ解決への見通し，エイズ不安の構造，エイズの身近度，エイズ患者への差別意識についても調査された。本研究は，これらの調査結果のうち，うわさに関連する部分のみを分析したものである。まず，うわさの接触・伝達にかかわる心理的な要因に関する既存の研究を紹介する。

［うわさの伝達メカニズム―あいまいさと重要性―］

うわさの伝達を促進する要因として重要さとあいまいさをあげたのは Allport, G. W. & Postman, L.（1947）である。うわさの流布量は，R～a×i（a はあいまいさ＝ambiguity，i は重要性＝importance）で示され，うわさの基本公式と呼ばれている。すなわち，うわさの流布量は「当事者に対する問題の重要さと，その論題についての証拠のあいまいさの積に比例する」（邦訳書 p 42）のである。その後，Chorus, A.（1953）によって部分修正され，うわさの流通量は，上記の2変数に個人の批判能力（critical sensibility）の逆比例項がつけ加えられたりしたが，基本的には，この2変数がうわさの流布量に関連する主要な要因として指摘されてきた。

これらの2変数のうち，あいまいさについては，うわさの伝達との関連を示す研究がいくつか見られる。もっとも初期の実験的研究として，Schacter, S. & Burdick, H.（1955）の実験的研究が有名である。この研究では，実験操作として認知的にあいまいな状況をつくり，うわさの発生と流布の状況を研究した。結果は明確であり，あいまいな状況がうわさの発生と伝達に影響を持つことが確かめられた。また，調査研究としては，Rosnow, R. L., Esposito, J. L., & Gibney, L.（1988），Kimmel, A. J. and Keefer, R.（1991）などがあり，いずれも，うわさの伝達とあいまいさとの間に有意な関連を報告している。前者においては，あいまいさ（uncertainty）を「a belief of intellectual state that is produced by doubt, as when events are unstable, capricious, or problematical」と定義する。さらに，あいまいさを，うわさ内容についてあいまいな認知を持っている場合（rumor-specific uncertainty），状況についてあいまいな認知を持っている場合（situational uncertainty），さらに，対処行動についてあいまいな認知を持っている場合（behavioral uncertainty）に区別し分析を行っている。操作的には，内容についてあいまいさは，もっともらしさ得点（後述）の再得点化で求める。もっともらしさのスケールの両端を答えた対象者はこのうわさについてあいまいさが低い（はっきりした結論を持ちうるから）と考え，逆に平均付近の対象者ほどあいまいさの認知が高いとする。平均からの距離の絶対値をもちいて得点化する。また，行動的なあいまいさは「うわさをはじめて聞いたときに，うわさによってもたらされるネガティブな結果を防いだり，少なくするのにどうしたらよいか知っていましたか」（4段階）で測定された。さらに，状況のあいまいさは「寄宿舎の安全性に関してあいまいさをどの程度に感じていますか」（4段階）と，話題になっている事件が起こった状況のあいまいさについての認識を指標にしている。Kimmel ら（1991）は，rumor-specific uncertainty と状況のあいまいさを指標として用いている。いずれの研究においても，うわさの伝達とは有意ではあるが弱い相関が報告されいる。しかし，うわさの伝達を目的変数とした重回帰分析においては，後述する不安要因だけが有意な変数として採用されている。

他方，オルポートらの定式化のもうひとつの項であるうわさ内容の重要性については，うわさの内容が伝え手にとって重要でないならば伝達されることは少ないとの仮定に基づいている。しかし，都市伝説とよばれるうわさは，個人にとっての重要性が低くても，話す楽しみを満足させるために伝達される（三隅譲二．1991）と考えることができる。この要因に関しては，既存の研究結果に一貫した結果が得られていない（Rosnow, R. L., 1980）。Esposito は，交通機関のストライキをめぐるうわさの研究で，内容の重要性と伝達の間に有意な相関を報告している（Rosnow, R. L., 1991）。一方，Rosnow, R. L., Esposito, J. L., & Gibney, L.（1988）では，重要性を「もしうわさが本当だとして，どのようなタイプの結果があなた自身にもたらせられると思いますか」とし，1．ポジティブ，2．ネガティブ，3．全く関係なしの三者から選択させ，1，2と答えたものを重要性の認知をしているとした。しかし，うわさの伝達と有意な関連を示していない。また，Kimmel, A. J. and Keefer, R.（1991）においては，ストレートにうわさの重要性を聞いたが，媒介的な働きをするにとどまっている。うわさ内容の重要性は，うわさ内容が実際に起こったとしたら，その結果が個人にとってどの程度の影響力を持つかによって測定されており，個人の関与度と関連する。

［うわさの伝達メカニズム―不安ともっともらしさ―］

オルポートらの基本公式への批判としてRosnow, R. L.（1980）は，あいまいさと不安がうわさの発生と伝達に強い影響力があるとした。現在ではあいまいさと不安がうわさの伝達に関連すると言うのが一般的な見方となっている。

不安については，心理変数としての不安傾向の強い個人は，うわさの伝達に関わるだろうと考えられ，個人の不安状態を測定する MAS を使った研究が行われている。Anthony, S.（1973），Jaeger, M. E., Anthony, S., & Rosnow, R. L.（1980）などであり，最近では，耳の不自由な高校生の集団でのうわさの伝播を研究したもので Anthonny, S.（1992）がある。MAS スケール（不安尺度）によって測定された不安は，うわさを知っている量とうわさの伝達量とともに関連していることが明らかにされた。このような個人の性格特性のひとつとしての不安傾向は，うわさの伝達と関連するという一貫した結果が得られている。さらに，不安については，うわさ自身がひきこおす不安（rumor-specific anxiety）がある。具体的な測定方法の一例は，「あなたがこのうわさを最初に聞いたときこのうわさの内容はあなたをどの程度不安にさせましたか」などがある（Rosnow, R. L., Esposito, J. L., & Gibney, L., 1998）。Walker, C. J. & Blaine, B.（1991）は，大学生を対象者に misadressed postcard method と呼ばれる手法で10種のうわさの植え付けを行った。10種のうわさは恐怖を喚起するうわさと願望を示すうわさが混ぜられていたが，流布したのは，恐怖を喚起するうわさでは73％が，願望を示すうわさでは27％と恐怖を喚起するうわさの方が流布しやすいことを示している。また，Rosnow, R. L., Esposito, J. L, & Gibney, L.（1988）の研究では，rumor-specific anxiety がうわさの伝達を予測するのにもっとも効果のある要因であった。しかし，不安を喚起するうわさは流れにくいという知見もある（Back, K. et. al., 1950）。

これらの不安に加えて，より一般的にはうわさの背景になる不安がある。世情が不安であるとうわさが流れやすいといわれるように，うわさをとりまく状況に存在する不安（situational anxiety）である。Kimmel, A, J, and Keefer, R.（1991）らの研究では，エイズにたいする対象者の持つ不安として測定され，うわさの伝達量を予測する重回帰分析では，この不安がもっとも高い寄与を示した。また，状況不安については，Walker, C. J. and Beckerle, S.（1987）は，実験的

に不安を喚起させる状況をつくり，高不安状況と低不安状況下でのうわさの接触を検証した。基本的に高不安状況群の被験者はより積極的にうわさを繰り返した。

これらの変数に加えて，最近になって注目されている変数に，もっともらしさ（credulity）がある。うわさの内容がどの程度ありうることと感じられるかということである。例えば，Rosnow, R. L., Yost, J. H, & Esposito, J. L., 1986 は，大学の労使交渉をめぐる多数のうわさを材料に，うわさの本当らしさ（confidence）を11段階スケールで評価しておき，それらのうわさの流通の度合いとの関連を分析したところ，本当らしいと評定されたうわさほどより多く流通することが確かめられている。また，実験的な研究では，Jaeger, M. E., Anthony, S. and Rosnow, R. L. (1980) が行っているが，同じうわさでも，信じられ易くする（believability）実験操作を行ったグループほど，より多くのうわさが流れた。Rosnow, R. L., Esposito, J. L. & Gibney, L.（1988）の研究では，もっともらしさが不安要因とともに，うわさの伝達に高い寄与を示している。

［三種のタイプ］

以上，うわさの伝達に寄与するとされる主要な要因について述べた。オルポートらの研究に対する批判の一つがさきに述べたうわさの基本公式に対するものであるが，うわさの伝達プロセスに関する批判もある。うわさの伝達実験として有名なオルポートらの実験は，一例を示すと一枚の街の様子を描いた図を最初の人に見せ，その図について述べられた内容が人から人に伝えられるプロセスでどのように変容するかを分析したものである。結論として，うわさ内容の平均化，強調化，同化のプロセスこそうわさの本質であるとした。これに対し，実験方法に関して，Treaway, M. & McClosky, M.（1989）のきびしい批判がある。また，Buckner, H. T.（1956）は，オルポートらの方法は，完全な実験室実験であり，冗長度の少ない状況であり，被伝達者が伝達者に質問することも許されていないなど，実際のうわさの伝達状況とはまったく異なるという指摘を行っている。いはば伝達実験は，直線的なチェインであり，現実の相互に作用しあうネットワーク構造とは本質的に異なっていると指摘する（注５）。

オルポートらの伝達モデルでは，チェインに組み込まれた人は，うわさを聞いた後にかならず次の人に伝達する。しかし，実際の社会でうわさがこのような直線的なチェインで伝達されることはほとんど考えられない。Sutton, H. & Porter, L. W.（1998）は，政府機関を調査し９種類のうわさの伝達経路を明らかにしているが，この研究によると，入手したうわさを次に伝える人は，９％，聞いたけど伝えない人69％，聞いたことのない人22％であった。彼はこれらの３つのタイプを liason, deadender, isolate と名付けている。この結果が示すように，うわさの伝達者（liason）は割合において少なく，またうわさを聞いたことのない人（isolate）もまた少ないことがわかる。大多数は，うわさを聞いたが人に伝えていない人（deadender）である。このように実際のうわさの伝達プロセスでは，人数の割合は別として３種類のタイプが存在していることが確かであり，うわさとの接触の有無，そのうわさの伝達という２段階のプロセスを想定すべきである。上に述べた研究のほとんどは，うわさを聞いて次に伝達した人＝liason かどうかを分析した研究が中心である。Rosnow（1991）のメタ分析に取り上げられた研究でも，isolate, deadender, liason と分類して上記の諸要因の間の関連を分析したものはない。うわさに接触しないこと，うわさに接触すること，そして，うわさを次に伝えることの間には，大きな差異があると考えられるのだが，これまでの研究はこれらの差異に注目せず，Sutton の用語でいえば，isolate と deadender をひとまとめにし，liason との比較研究を行ってきたのである。

オルポートらの伝達モデルはうわさの伝達者のみから構成されており，deadender は最後の受け手一人である。ましてや，isolateは，モデルに組み込まれていない。しかし，現実のプロセスでは，うわさとの関わり方は，このように3つの可能性を持っているのである。

うわさの伝達に関わる諸要因の研究が，上に述べたようにすでに聞いたうわさの伝達に焦点をあててなされてきたわけだが，このことの問題点は，従来の知見が聞いたうわさを他人に伝達するかどうかに関わる要因の分析であった点である。他人にうわさを伝達するかどうかの前に，うわさへの接触，非接触を区別する要因という視点も必要とされるだろう。

本研究は，エイズに関するうわさを聞いたことのない人，聞いたことのある人，さらにその話を他人に伝達した人を，どのような要因から判別できるのかを分析したものである。分析に用いた要因は，これまでの研究知見をもとに，（1）あいまいさ（ambiguity），（2）重要性の認知（importance），（3）不安（anxiety），（4）もっともらしさ（credulity）の4要因をとりあげた。さらに，エイズに関する知識・情報入手についてもとりあげた。各要因とうわさの接触・流布との関係についての仮説は次節の方法で述べる。

方　法

[分析データ]

本研究に用いたデータは，「うわさとニュースの研究会」が，1993年3月5日—12日に実施した「エイズとうわさ」に関する調査である。調査対象者は，株式会社朝日エルに登録された首都圏モニターから，性別，年令別（20，30歳代）に抽出したものである。調査表は郵送され，回答後郵便で回収された。有効回収数は220票（男性115名女性105名）であった。調査対象者の基本属性は表1の通りであった。調査に用いた調査表に調査結果をまとめたものを付録として添付する。全体についての調査結果は，川上善郎，岡山慶子，松田美佐（1993），松田美佐（1993）に述べられている。

表—1　調査対象者の基本属性

	全体	男性	女性
—24歳	26.4	19.1	34.3
25—29歳	26.4	33.0	19.0
30—34歳	29.5	29.6	29.5
35—39歳	17.7	18.3	17.1
全体(人数)	220	115	105

[分析に用いた項目]

1．対象者の分類

目的に述べたように本研究は，エイズに関するうわさを聞いたことのない人，うわさを聞いたことのある人，さらに，うわさを聞いた人のうちその話をさらに伝達した人を区別する要因を明らかにすることである。Sutton, H. & Porter, L. W.（1968）にならって，isolate，deadender，liason と呼ぶ。該当した人数は，isolate（68人），deadender（73人），liason（78人）であった。タイプ別に基本属性を表2に示す。年齢では差がみられない（$p<0.36$）が，性別で有意な差が見られた，女性に liason が多く，男性に isolate が多い（$p<0.01$）。

表—2　性別グループの基本属性

	Isolate	Deadender	Lison	
Man	41(35.7)	44(38.3)	30(26.1)	
Woman	27(25.7)	29(27.6)	49(46.7)	p<0.006
—24	18(31.0)	15(25.9)	25(43.1)	
25—29	14(24.1)	20(34.5)	24(41.1)	
30—34	20(30.8)	25(38.5)	20(30.8)	
35—39	16(41.0)	23(33.3)	10(25.6)	p<0.36
Total	68(30.9)	73(33.2)	79(35.9)	

2．あいまいさの要因：Uncertainty

エイズにたいするおそれについての一群の質問を因子分析したところ，次のような項目が第3因子として抽出された（表3）。「注射や輸血でうつるかもしれない」（78％：強く思う，そう思うと答えたものの割合）「他人に知らないうちにうつされるおそれ」（31％）「エイズにかかったかどうかはっきりしないおそれ」（26％），さらにQ18「からだの調子などをくずした時に，ふとエイズに感染しているのではないかと思うことがありますか」（21％：1回でもあるものの割合）などが高い因子負荷量を示している。これらの項目に共通していることは，自分の知らないうちにエイズに感染してしまうことへの不安である。エイズにどのようにして感染するのかあいまいなことへの不安である。この因子への因子得点をエイズに対するあいまいさ得点とした。このあいまいさは，エイズ状況のあいまいさ（situational uncertainty）を示すものと考えておく。仮説としては，この因子に高い得点を示すもの，すなわちエイズに対するあいまいさを強く持つものほど，エイズをめぐるうわさへの接触，うわさの伝達と関連が強いと予想できる。

また，行動のあいまいさ（behavioral uncertainty）という視点からは，エイズへの対処行動や治療への見通しも関連してくるだろう。「エイズの世界へようこそ」といううわさに対して，対処行動をとりうると考えている対象者は行動のあいまいさが低いことを意味するだろう。また，治療への見通しとして近い将来に新薬が発見されると考える対象者も行動のあいまいさは低いと

表—3　エイズに関連する不安の構造
因子分析（回転後の因子負荷量）

変　数　名	因子1	因子2	因子3
Q20. 周囲から差別される	0.9077	0.0719	0.1536
Q20. 隔離されるおそれ	0.8859	0.0491	0.1584
Q20. 仕事をうしなうおそれ	0.8547	0.1302	0.0323
Q20. 家族が恥ずかしい思い	0.8096	0.1021	−0.0782
Q20. 死にいたるおそれ	0.6982	−0.0477	0.2903
Q 3. うわさ話どのていど関係	−0.0547	−0.8096	0.0328
Q17. エイズ感染の不安	0.0618	0.7611	0.3146
Q19. エイズは切実で身近な問題	0.2175	0.7044	0.2053
Q18. エイズ感染ではないか	0.0216	0.4488	0.4384
Q20. エイズかはっきりしない	0.1936	0.1598	0.7697
Q20. 知らないうちにうつされる	0.0988	0.2208	0.7528
Q20. 注射や輸血でうつるおそれ	0.2373	0.0007	0.5183
因子負荷量2乗和	3.6403	2.0439	1.9023
寄与率（%）	30.3362	17.0322	15.8522
累積寄与率（%）	30.3362	47.3684	63.2206

考えられる。Q 13「エイズは自分さえ注意していれば感染を妨げる病気だと思いますか」に対して「防げる」「まあ防げる」あわせて56%である。半数は，自分が注意すれば防げると考えている。これらの対象者は，そうではない対象者に比してエイズに対する行動のあいまいさが低いということになり，うわさへの接触，伝達は低くなると考えられる。

また，Q 16「近い将来（4—5年のうちに）エイズ治療薬が開発されそうだと思いますか」に対して「そう思う」「まあそう思う」は42%である。楽観的な見通しをもつものとそうでないものがいる。楽観的な対象者ほど，エイズについてのあいまいさが低く，不安も少なく，結果としてうわさへの接触，伝達は低いと考えられるだろう。

3．重要性の認識：Importance

エイズを対象者がどの程度自分自身にとって切実な問題としてとらえているのかを重要性の指標とする。エイズ問題がどの程度身近なものかを示す質問群をまとめて得点化した。具体的には表3に示した因子分析の因子得点を用いている。重要性の因子として抽出された項目は，Q 3，Q 17，Q 18，Q 19の四項目である。簡単にそれの質問に対する単純集計結果にふれておく。Q 3「この『うわさ話』はあなたにどのていど関係あると思いますか」に対して「自分とはまったく関係ない話である」(26%)「自分とはほとんど関係ない話である」(36%)「もしかしたら関係する話かもしれない」(36%)「自分と関係のある話だと思う」(2%）と関係ないと答えるものがやや多い。Q 17「あなたは，エイズに感染するのではという不安を持っていますか」に対して，「強い不安を持っている」(1%)「不安を持っている」(23%)「どちらともいえない」(26%)「あまり不安ではない」(35%)「まったく不安ではない」(16%）と約4分の1は，自分が感染するのではという不安を持つ。また，Q 18「からだの調子などをくずした時に，ふとエイズに感染しているのではないかと思うことがありますか」に対し，「よくある」(1%)「たまにある」(7%)「1—2回ある」(13%)「まったくない」(80%）と感染したのではないかという体験を持つものは2割程度である。Q 19「エイズはあなたにとってどの程度切実で身近な問題だと思っていますか」という問に，「とても切実である」(8%)「まあ切実である」(21%)「どちらともいえない」(24%)「あまりそう思わない」(34%)「そう思わない」(13%）と切実なものが多い(注6)。これらの質問群を代表する因子得点によって，エイズ問題の重要度の程度を定義する。この得点が高いものほど，エイズを身近で切実な問題として受けとめていることを示している。これまでの研究知見から，仮説としては，重要度の認知が高い対象者ほど，エイズをめぐるうわさへの接触，うわさの伝達の程度は高いと予想できる。

4．不安：Anxiety

エイズについての不安項目を因子分析したところ，第一因子として次の項目が抽出された（表3)。「エイズにかかると死にいたるおそれ」(78%：強く思う，そう思うと答えたものの割合)「エイズにかかると周囲の人から隔離されるおそれ」(76%)「エイズにかかると周囲の人から差別されるおそれ」(80%)「エイズにかかると仕事をうしなうおそれ」(69%)「世間に知られると家族が恥ずかしい思いをする」(73%)。いずれの項目も大変に高い割合を示しておりエイズに対する不安は強い。これらの不安の特徴は，エイズが死にいたる病であるという生物学的な死に対する不安ばかりでなく，社会的な差別に対する不安に特徴づけられている。エイズに感染すると差別される，隔離される，失職してしまう，家族が恥ずかしい思いをするなど，エイズ感染がも

たらす結果についての不安である。目的に述べた三種類の不安のうち，エイズ状況が人々に与える不安のひとつである。状況的な不安に分類できるだろう。具体的には因子分析によって抽出された因子の因子得点をエイズに対する不安得点とした。仮説としては，この因子得点の高いものは，エイズに対する状況不安が高いことから，エイズをめぐるうわさへの接触，うわさの伝達の程度は高いと考えられる。

5．もっともらしさ：Credulity

もっともらしさの指標として，「エイズの世界へようこそ」と呼ばれるうわさについて「あなたは，この『うわさ話』のようなことが本当にありうる話だと思いますか」という質問への結果を用いた。「ありうると思う」(51%)「まあありうると思う」(35%)「どちらともいえない」(8%)「あまりありそうでない」(6%)「ありそうもない」(1%) という結果であった。大多数が，うわさに語られているようなことがありうることだと考えている。この指標で高い得点を示すものほど，うわさを他人に伝える可能性が高いと予想できる。

6．エイズに関する情報・知識

Shibutani, T. (1966) は，「流言とは，あいまいな状況にともに巻き込まれた人々が，自分たちの知識を寄せあつめることによって，その状況について有意味な解釈を行おうとするコミュニケーションであり，こうしたコミュニケーションが繰り返し生じたときにこれを流言と呼ぶ」(邦訳書 p 34) と規定する。あいまいな状況を解釈する集合的なプロセスとしている。現在のエイズをとりまく状況は，まさにシブタニの規定する流言が生ずる状況である。不安とあいまいさに取り囲まれた状況を多様なメディアを通して情報を入手して解釈可能なものに組み替えたいという欲求を仮定できるだろう。うわさへの接触者（伝達者を含めて）は，各種のエイズ情報への接触も高いと予想できる。そこで，エイズに関する知識や情報源，情報源への信頼性についての項目を要因としてとりあげてみた。

エイズの持つ不安やあいまいさを減少させるためにエイズについて正しい知識を持つことの必要性が指摘 (Kimmel, A. J. & Keefer, R., 1991) されている。主観的にであれ，エイズに関する知識を持っているという認識は，エイズにたいする不安やあいまいさを減少させ，うわさへの接触を減少させると予想できる。主観的な知識量の多さを調べたQ 11「あなたはエイズに関してどの程度知識を持っていると思いますか」にたいして，「持っている」4%「まあ持っている」42%「どちらともいえない」29%「あまり持っていない」23%「持っていない」1%と「まあ持っている」と答えるものが多い。

Q 11は，主観的な評価であるが，実際の情報行動の指標として「あなたはエイズに関する記事や本を読んだり，講演などに参加したりしたことがありますか」という項目で，単行本，週刊誌の記事，新聞の記事，テレビ番組，ラジオ番組，講演会，パンフレット，その他について，何種類のメディアからエイズに関する情報を集めているかを指標化した。うわさへの接近をあいまいな状況の再解釈 (Shibutani, T., 1966) のための情報行動と考えるならば，その他のメディアへの接触も高いことが予想できる。しかし，各種の情報源が適切な情報を与えている場合には，うわさへの接触は減少するとも考えられるだろう。

Q 14「あなたは，エイズに関するさまざまな情報にどの程度信頼をおいていますか」という問いに「信頼できる」「まあ信頼できる」と答えたものは，世間を流れる情報 (11%)，週刊誌の情

表—4　エイズに関して信頼している情報源
因子分析（回転後の因子負荷量）

変数名	因子1	因子2
Q14政府	0.9318	−0.0137
Q14地方	0.9259	0.0409
Q14保健所	0.8765	0.1615
Q14新聞	0.6366	0.5024
Q14テレビ	0.5104	0.6552
Q14週刊誌	0.0622	0.8710
Q14世間情報	−0.0723	0.8267
因子負荷量2乗和	3.1687	2.1517
寄与率（%）	45.2669	30.7386
累積寄与率（%）	45.2669	76.0056

報・記事（17%），新聞の情報・記事（64%），テレビ番組の情報（48%），政府の広報誌の情報・記事（77%），地方自治体のパンフなどの情報（75%），保健所の情報（84%）と公共機関による情報にとても高いのに対し，世間を流れる情報や週刊誌に対する信頼は低い。テレビ，新聞などのマスコミは公共機関の情報と比較するとやや低い。これらの質問に対する反応をもとに因子分析を行ったところ，表4に示すように，政府，地方自治体，さらに保健所などの流す「公共情報」と，世間を流れる情報，週刊誌の情報・記事など「世間情報」の2種類の情報に分類された。テレビ・新聞などのマスメディアは，エイズ情報に関しては，「公共情報」の側面と「世間情報」の側面の両面を持つと考えられる。エイズに関する情報には，いはば表の情報と裏の情報ともいうべきものがある。前者が後者に比して信頼度は圧倒的に高いのは言うまでもない。「公共情報」への信頼度の低い人，また「世間情報」への信頼度が高い人ほどうわさへの接触は高いことが予想できる。

[分析方法]

うわさへの接触行動を基準変数として，isolate，deadender，liason の三群の判別分別を行った。説明変数は上に述べた諸変数である。識別すべき各グループ別の平均値を表5に示す。判別分析については，高木廣文（1994），柳井晴夫，高木廣文（1986）に詳しい。なお，基準変数に関して性差がみられたので，男女別及び全体で判別分析を行ったが，男女間に構造の違いが見られなかったので，全体の結果をもとにして結果の報告と考察を行う。

表—5　判別分析に用いた変数の基本統計量

	Total	Isolate	Dead-ender	Liason
1) Credulity	4.265	4.000	4.301	4.462
2) Knowledge	3.256	3.324	3.205	3.244
3) Information Seeking	3.128	2.941	3.068	3.346
4) Controllable	3.507	3.500	3.370	3.641
5) Optimistic View	3.123	2.956	3.055	3.333
6) Aids Anxiety	0.000	0.017	−0.040	0.023
7) Importance	0.000	−0.023	0.167	−0.168
8) Uncertainty	0.000	−0.219	−0.085	0.271
9) Credibility (Public)	0.000	0.010	−0.111	0.071
10) Credibility (Personal)	0.000	0.112	−0.365	0.199

項目1—5は，5段階評定のグループ別の平均値であり，高い得点ほど表題の傾向が強いことを示す。また，項目6—10は，因子得点のグループ別の平均値である。プラス側が表題の傾向が強い。

結果と考察

各グループへの的中率は53％である。図１にグループ別の判別結果を図示する。isolate，57％，deadender，41％，liason，62％の的中率であった。各グループの判別空間における重心を図２に示す。第Ⅰ軸は，liason と他の２群を区別する軸であり，第Ⅱ軸は，deadender と isolate を区別する次元である。

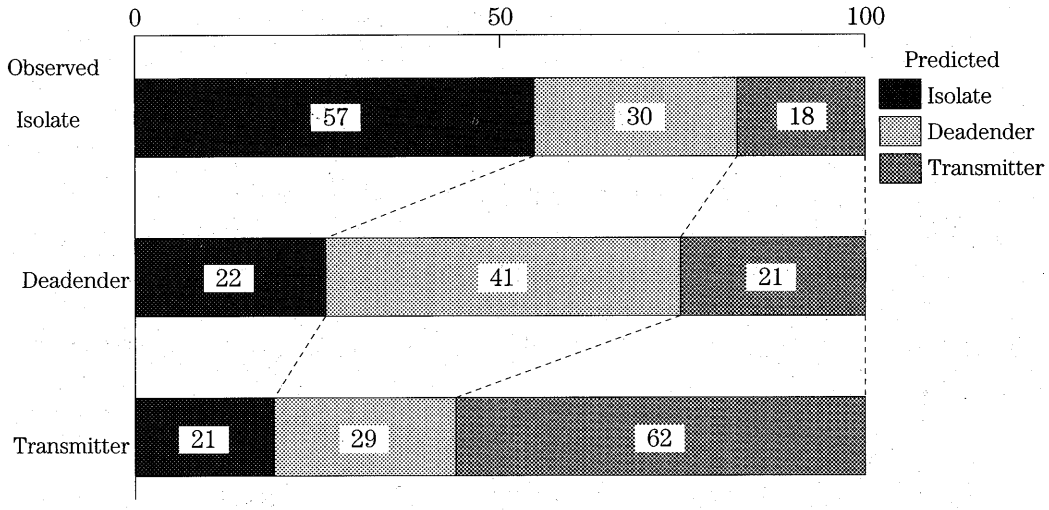

図１　判別グループ別の的中率

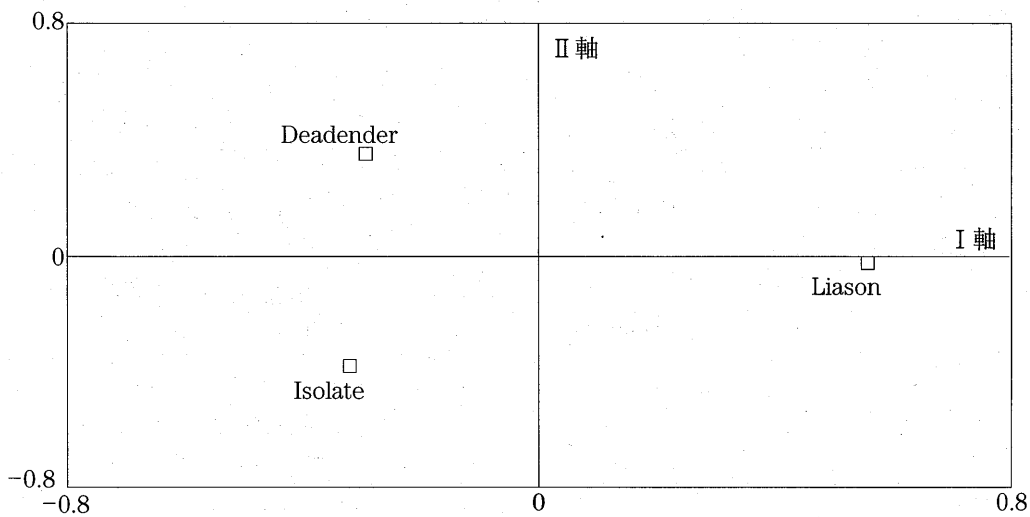

図２　判別グループの重心の布置

表―6　判別分析の結果：標準化判別係数

変数名	判別係数1	判別係数2	有意確率
1) Credulity	0.464926	0.464565	0.00705
2) Knowledge	−0.204442	−0.177901	0.43984
3) Information Seeking	0.425339	0.297183	0.03530
4) Controllable	0.311689	−0.052256	0.23604
5) Optimistic View	0.317998	0.010375	0.22048
6) Aids Anxiety	0.057449	0.002231	0.95111
7) Importance	−0.367754	0.201519	0.10015
8) Uncertainty	0.510336	0.246237	0.01192
9) Credibility (Public)	0.117527	−0.203302	0.58969
10) Credibility (Personal)	0.343148	−0.813275	0.00093
正準相関係数	0.38745	0.27990	
バートレットのカイ2乗値	51.65631	17.25475	
上側確率	0.00013	0.04487	

表6は，標準化判別係数と用いた変数の有意性を示す。判別に有意であった要因は，情報源の信頼性―世間情報（source credibility : personal），もっともらしさ（credulity），あいまいさ（Uncertainty），情報探索行動（imformation seeking），重要性（importance）であった。

図3に，標準化判別係数にもとづき各要因の得点を図示した。さらに，各グループの重心を一つの図にまとめた。この図から，各変数が各グループとどのように関連しているかが理解できよう。以下各要因ごとに結果を述べる。

1．あいまいさ

あいまいさは，判別に有意であった（$p<0.02$）。第Ⅰ軸で高いプラスの値をとり，第Ⅱ軸でもプラスである。第Ⅰ軸では，liason に，第Ⅱ軸では deadender に関連していることになる。

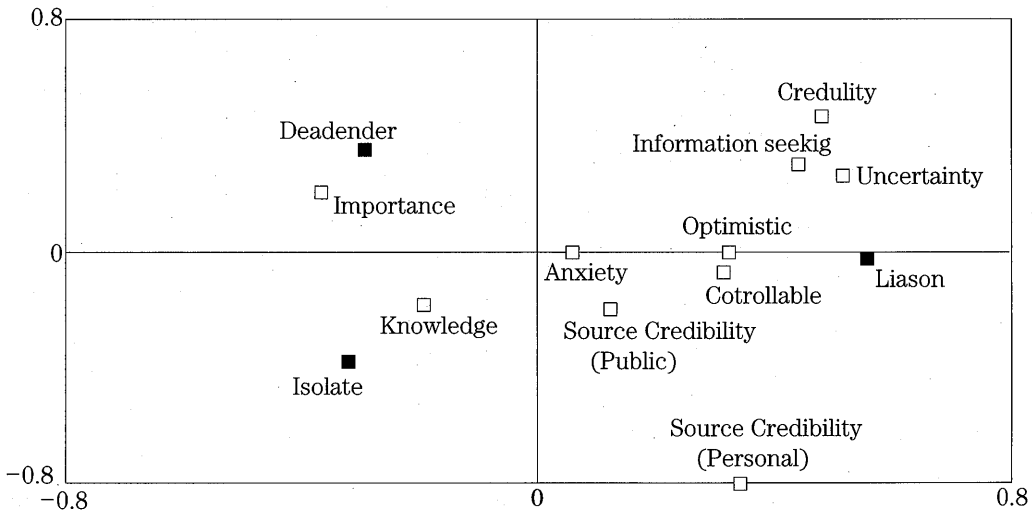

図3　標準化判別係数の布置

あいまいさを感じない対象者はisolateとなり，あいまいさを強く感じる対象者は，うわさの伝達者，あるいはdeadenderになる。すなわち，エイズ感染についてのあいまいさの認知は，うわさへの接触とうわさの伝達を促進する傾向にあることを示している。

しかし，ここで用いられた「あいまいさ」は，「エイズ不安」にたいへん近いものである。確かに，エイズに感染したかどうかはあいまいであり，そのあいまいさゆえに，エイズにたいする不安を形成している。そのような意味で，この変数は，状況のあいまいさとエイズ不安とが混在したものと考えた方がよいだろう。

エイズにたいして，自分で注意していれば防げる（controllable）と考えている対象者は，「エイズの世界にようこそ」といううわさの内容に対しどのように対応したらよいかというスキーマをもっていることになり，行動的なあいまいさは低いと考えられる。仮説的には，isolateへの負荷が高いと予想されたのだが，結果は逆であり，liasonとの関連が強い。すなわち，自分の力で防げないと考える対象者にdeadender，isolateが多いことを示している。行動的なあいまいさの低い人がうわさを流布する傾向にあることを示しているが，統計的には有意ではない。また，治療の見通しについても，楽観的な対象者ほどliasonとなっている。仮説的には，楽観的な対象者ほどエイズについてのあいまいさが低く，うわさへの接触が低いとされたが，上記の変数と同様に逆の結果がみられた。しかし統計的には有意ではない。

2．重要性の認知

重要性は，これまでの研究ではあまり効果がないと指摘されている。本研究では，ボーダーラインで統計的に有意な結果である（$p<0.10$）。重要性は，第Ⅰ軸マイナス側，第Ⅱ軸プラス側に位置する。deadender，isolateほど重要性の認知が高い傾向にある。エイズと自分自身との関わりが強いと考えている対象者ほど，うわさに接触しない，あるいは，接触しても他人に伝えない傾向にある。逆に，エイズと自分との関わりが少ないと認知しているものが，他人にうわさを伝達する傾向にあることを示す。重要性のとらえ方にもよるのだが，不安を伴った強い自己関与は，これまでの仮説と異なり，うわさの伝達を減少させるのかも知れない。また，行動的あいまいさの結果とあわせて解釈するならば，エイズについて，コントロールのできない，そして悲観的な見通しを持ち，身近な問題として深刻に受けとめている対象者ほどうわさへの接触と，聞いたうわさを他者に伝達することが少ないと考えられる。これまでの知見と異なり，事態が個人に取ってコントロール不能で深刻でありすぎるとき，不安を喚起するうわさから遠ざかることを示唆しているといえるだろう。

本研究の重要性の指標が，これまでの研究と違うところは，エイズに感染したと思ったことがあるかなどの現実の不安体験から作られており，単なる重要性の認知とは深刻さの程度が異なる点である。従来の知見と異なり，重要性の認知は，うわさへの接触を促進しても，それを他人に伝えさせるものではないことを本結果は示している。逆に聞いた話しを他人に伝えさせるのは，重要性の認知が低い対象者である。

3．不安

不安とうわさの伝達を扱ったこれまでの研究は，不安がうわさの伝達に強い影響を持つことを示している。しかし，エイズのもたらす結果についての不安は，本研究では，グループを判別するのに有効な要因でないことを示している。用いられた項目は，エイズのもたらす結果について

の不安・恐れであり，うわさをとりまく状況への不安の強さを示すものである。しかし，有意な結果は得られなかった。この理由としては，因子分析でもとめられた因子は，「エイズにかかるとかならずもたらされる状態」と認知されている不安であり，人々の意識の中ではあいまいさのない不安である。不安ではあるが，非常にはっきりした結果をもたらす不安は，うわさへの接触や伝達に関連しないのかもしれない。今後の分析課題である。

4．もっともらしさについて

もっともらしさは，第Ⅰ軸，第Ⅱ軸ともにプラスの高い値をとっている（$p<0.01$）。図3からも読み取れるように，もっともらしさを感じる対象者は，liason と deadender に多い。うわさの内容にもっともらしさを感じない対象者は，うわさとの接触が低い傾向にある。もっともらしさの認知は，うわさへの接触と伝達を促進する傾向にある。従来の知見に一致する。本研究の枠組みでいうと，「エイズの世界にようこそ」といううわさを読んで，「もっともらしい」と感じた対象者に，うわさの接触・伝達経験者が多いということであり，「信じやすい」人にうわさの接触・伝達経験者が多いことを示している。

5．エイズに関する情報・知識

エイズ知識は判別にほとんど影響を持たない。傾向的には，予想されたように，うわさへの接触を減少させる傾向にあるが有意ではない。

エイズに関する情報をえるための探索活動は，第Ⅰ軸，第Ⅱ軸ともにプラスであり，liason，deadender に関連する（$p<0.04$）。情報探索行動の盛んな対象者ほど，うわさへの接触の頻度も高く，他者への伝達も多い。isolate は，情報探索行動が少ない。現代社会は，うわさは多様なメディアを通して流布されている（注7）ので，多くのメディアに接触するものほどうわさへの接触のチャンスは高いとも考えられるし，うわさに接触する対象者は，その他のメディアへの接触も多いとも見られる。

情報源の信頼性に関しては，公共的な情報については判別に影響はない。すなわち，エイズに関する公式的な情報に対する信頼度は，判別に影響をもたない。しかし，世間を流れる情報については，第Ⅰ軸プラス，第Ⅱ軸マイナスであり，liason，isolate と deadender を区別するのに効果がある（$p<0.001$）。世間を流れる情報＝エイズに関する人々の話や週刊誌などの記事について信頼をおかない人に deadender が多いことを示している。要するに，deadender は，うわさに接触するが，これらの情報源に対する信頼度が低いので，他者にうわさを伝達することをしない。

ま と め

本研究は，エイズとうわさの調査結果から，うわさへの接触，うわさの伝達を促進する要因を明らかにする目的で行われた。本研究で明らかにされた点をまとめる。

1．あいまいさは，従来の知見通り，うわさの接触および伝達に関係していた。あいまいさを感じる対象者ほどうわさへよく接触しており，またそのうわさを他人に伝える傾向にある。

2．重要性の認知は，仮説とは逆の結果であった。仮説では，重要性の認知が高い対象者ほどうわさへの接触・伝達に関連するとされた。しかし，本研究では，重要性の認知の低い対象者ほど，うわさの伝達に関わり，重要性の認知の高い対象者はうわさへの接触のみで終わるか，接触しない傾向にある。

3．不安は，多くの研究が関連ありとしているが，本研究では有意な傾向を見いだせなかった。不安が，うわさの接触・伝達と関連を示すわけではないことを意味する。あいまいさと結びついた不安とあいまいさの少ない不安では異なった働きをする可能性を本結果は示している。

4．最近の研究知見と同様，うわさのもっともらしさは，うわさとの接触を促進させ，同時にうわさの伝達をも促進する。個人の特性という視点からは，うわさなどの情報を信じやすい人が，うわさの接触・伝達を積極的にするとも解釈できる。

5．エイズに関する情報探索活動の多い対象者ほど，うわさとの接触を促進させ，同時にうわさの伝達をも促進する。エイズに関するうわさが，各種のメディアを通して流通している現実があり，情報探索活動の盛んな対象者は，うわさに接触するチャンスが高いからである。

6．世間を流れる情報に信頼をおかない対象者は，うわさとの接触はあっても，他の人に伝えることは少ない。情報源の信頼度が低いとうわさとの接触があっても，うわさの伝達が抑制されることを示している。

このように，本研究では，従来の知見を補強する部分と従来の知見と異なる部分が得られている。最後に，従来の知見と異なる部分について考察し，あわせて今後の課題にふれる。

Shibutani, T.（1966）は，「人々はまず，制度的チャンネルに情報を求める。‥‥しかし，もし既存の情報源から適切な情報が得られないならば，問題は解決されずむしろ欲求不満が高まっていく」（邦訳書 p 88）とし，「もし人々の求めるニュースが，制度的なチャンネルを通して獲得されることが期待できないものであるなら，その時は流言が拠りどころとなる」（邦訳書 p 89）と述べている。うわさに対する Shibutani の捉え方は，エイズとうわさの関係についてもかなりの程度あてはまる。とくに，86—87年における「エイズパニック」時には，人々の求めるニュースが制度的なチャネルを通して獲得されなかったために引き起こされ，さまざまな流言が発生したと解釈できるだろう。現在では，当時と比べ，公的チャネルを通してのエイズ情報は，調査結果（注１参照）にも示すように，量的にも多く，情報源に対する信頼度もきわめて高い。それにもかかわらず，エイズをめぐるうわさは，あいかわらず流布しているのが実状である。エイズをとりまく現在の情報環境は，Shibutani の記述する状況とは異なってきていると考えざるをえないだろう。現在のうわさの流布については，別の説明原理が必要とされるだろう。

さらに，本調査で扱った「エイズの世界へようこそ」は，Shibutani の指摘するような，ニュースを伝えるうわさではない。そのうわさは，都市伝説と言われるものである。松田美佐（1993）は，「噂には情報としての価値，あるいは意見発露の手段としての価値がないようなものも存在する」とし都市伝説をあげ，「これらは『娯楽のための噂』として理論的討論が充分になされてこなかった」と指摘する。また，三隅譲二（1991）も，オルポート以来の伝統的な流言の対極に都市伝説をおき「自己目的的流言」と規定し，伝統的な流言とすべての点で異なると主張している。さらに，早川洋行（1994）は，流言と都市伝説の背景の違いとして，前者が「不安」を背景にして成立するのに対し，後者は「飽き」を背景として成立すると述べている。用いられている概念は少しずつ違うが，都市伝説とよばれるうわさは「楽しみのため」に話されるという点で，社会心理学が扱ってきたうわさとは異なっているという指摘である（注８）。

本結果が従来の知見と異なっているのは，従来のうわさ研究が，松田美佐（1993）の指摘するように道具的側面のみからうわさを捉えてきたことと関係するのだろう。上記の研究者らの指摘に従って「楽しみのため」に話されるうわさとして解釈するとしたら，上記まとめの２に述べた

「重要性の認知の低い対象者ほどうわさの伝達に関わり，重要性の認知の高い対象者ほどうわさへの接触のみで終わるか，接触しない傾向にある」，さらに3の「不安は，かならずしもうわさの接触・伝達と関連を示さない」という結果も充分妥当なものと言えるだろう。さらに，その他の項目についても，このような視点と矛盾するものではない。

このような解釈が成立するならば，うわさへの接触，うわさの伝達を促進する要因を分析する研究においては，「うわさ」の果たす機能（注9）との関連で議論される必要を示唆することになるだろう。先行研究について，基本的な概念の再検討と，研究で用いられているうわさの果たしている機能との関わりでレヴューしなおすことが必要であろう。

注

注1：付録の調査結果Q12に示すように，エイズに関する講演会の参加者1.4%，パンフレット16.4%などにも情報提供の効果がみられる。また，Q14提供される情報の信頼度についても，政府の広報誌，地方自治体のパンフなどの情報に対する信頼度は，マスメディアなどよりもかなり高く，公共機関の情報提供活動は一定の成果をあげているといえるだろう。

注2：アメリカでの調査では，蚊によって伝染する93%，プールで伝染する52%，キスで伝染84%といずれも高い割合で流布している（Kimmel and Keefer 1991）。付録の調査結果Q10は，わが国で，各種のエイズに関連するうわさの流布状況を示しているが，かなりの範囲で広がっていることを示している。

注3：調査表の作成にあたっては，横浜市立大学川浦康至氏，東京大学池田謙一氏，常磐大学古川良治氏のご協力をいただきました。感謝の意を示したいと思います。

注4：都市伝説といわれるもので，Brunvand（1989）にも収録されている。アメリカを中心に世界各国に流布され，わが国でも広く流布している。うわさは，次のような内容である。「街で美しい女性に出会い，仲良くなった男はホテルでこの女性と一夜をともにした。翌朝目をさますと彼女はいなかった。バスルームへ行くと鏡に『WELCOME TO AIDS（エイズの世界へようこそ）』と真っ赤な口紅で書かれていた」。このうわさについて，G. A. Fine（1987），松田美佐・川上善郎・岡山慶子（1993）がフェミニズムの立場から取り上げている。都市伝説については，三隅譲二（1991）の考察が参考になる。

注5：Buckner についての紹介は早川洋行（1994）に詳しい。

注6：本学の学生に調査した中西尚道（1993）の結果では，「現実的に，エイズを身近な問題として感じていますか」という質問に対して「かなり感じている」「ある程度感じている」はあわせて59%と高い。中西ゼミ調査と本調査の違いは，中西ゼミのデータが大学生であり年齢が若い点にある。本調査でも，年齢が若いほど切実度は高いという結果が得られている。

注7：うわさの入手経路を調査しているが，テレビ35.9%，ラジオ5.9%，新聞33.2%，雑誌 50.5%，単行本4.5%であり，人から直接聞いたものは35.5%であった。口づたえ以外のメディアも多く，多数のメディアに接触するものほどうわさに接触する可能性は高くなるといえるだろう。

注8：都市伝説研究が，従来のうわさ研究の見落としてきた領域であるとするならば，ゴシップ研究も見落とされている領域である。最近のエスノメソドロジーの立場からのゴシップへのアプローチなどの成果も注目すべきであろう（Eder, D. & Enke, J. L. 1991）。

注9：Fine, G. A. & Rosnow, R. L.（1978）は，うわさの機能として，Information, Influence, Entertainment の三点をあげている。しかし，うわさの機能からの分析はない。

参考文献

Allport, G. W. & Postman, L. The psychology of rumor : Henry Holt, 1947 南博訳　デマの心理学　岩波書店，1952

Allport, G. W. & Postman, L. An analysis of rumors. Public Opinion Quarterly. 1947, 10, 501–17.

Anthony, S. Anxiety and rumor. Journal of Social Psychlogy. 1973, 89, 91–98.

Anthony, S. The influence of personal characteristics on rumor knowledge and transmission among deaf. American Annals of the Deaf. 1992 (Mar), Vol. 137 (1), 44–47.

Back, K., Festinger, L., Hymovitch, H., Schachter, S. and Tibaut, J. The methodology of studying rumor transmission. Human Relations, 1950, 3, 307–312.

Buckner, H. T. A theory of rumor transmission. Public Opinion Quarterly. 1965, 29, 54–70.

Brunvand, J. H. Curses！ Broiled Again！ The Hottest Urban Legends Going. 1989　行方均訳，くそっ！なんてこった，新宿書房，1991

Chorus, A. The basic law of rumor. Journal of Abnormal and Social Psychology. 1953, 48, 313–314.

Eder, D. & Enke, J. L. The structure of gossip : Opportunities and constraints on collective expression among adoescents. American Sociological Review. 56, 494–508, 1991.

Fine, G. A. Welcome to the world of AIDS : Fantasies of Female Reverenge. Western Folklore, 46 : 192–197., 1987.

早川洋行　現代社会における流言，社会運動論の統合をめざして　成文堂，313—337，1990

早川洋行　流言の根底にあるもの，社会運動の現代的位相　成文堂，245—265，1994

Higham, T. M. The experimental study of the transmission of rumour. British Journal of Psychology. 1951, 42–55

市川孝一　外国人による婦女暴行デマとその背景　生活科学研究，第14集，文教大学生活科学研究所，pp 1—16，1992

市川孝一　「皇太子御成婚」どう語られたか　人間科学研究　第15号，文教大学人間科学部，pp 38—48，1993

Jaeger, M. E. Anthony, S. & Rosnow, R. L., Who hears what from whom and with what effect : A study of rumor. Personality and social Psychology Bulletin. 1980, 6, 473–478.

川上善郎　ニュースの伝播研究　情報研究　第14号，文教大学情報学部紀要，pp 85—104，1993

川上善郎　メディア・イベントの視聴構造—「結婚の儀報道」をめぐって　生活科学研究，第16集，文教大学生活科学研究所，pp 31—41，1994

川上善郎・岡山慶子・松田美佐　「エイズとうわさ」調査報告書　うわさとニュースの研究会　1993

川上善郎・川浦康至・池田謙一・古川良治　ニュースの伝播過程に関する調査報告書　うわさとニュースの研究会　1993

川上善郎　「平成米騒動」お米とうわさの調査報告書　うわさとニュースの研究会　1994

Kimmel, A. J. and Keefer, R. Psychologiacl correlates of the transmission and acceptance of rumors about AIDS. Journal of Applied Social Psychology. 21, 19, 1608–1628.

松田美佐，岡山慶子，川上善郎　エイズとうわさ—うわさから見える不健全な他者—第34回日本社会心理学会大会論文集　1993

松田美佐　エイズにおける噂の研究　「女がエイズを考える」朝日新聞社，1993

松田美佐　噂研究から噂を通じた研究へ　マスコミュニケーション研究　No. 43，132—145，1994

三隅譲二　都市伝説：流言としての理論的一考察　社会学評論　Vol. 42，pp 17—31，1991

中西尚道　真面目にTABOOを考える　中西ゼミ　1993

Rosnow, R. L., Psychology of rumor reconsidered. Psycholgical Bulletin. 1980, 87, 578–591.

Rosnow, R. L., Yost, J. H. & Espoito, J. L. Belief in rumor and likelihood of rumor transmission. Language and Com-

muncation, 1986, 6, 189–194

Rosnow, R. L., Esposito, J. L., & Gibney, L. Factors influencing rumor spreading : Replication and extension. Language and Communication. 1988, 7, 1–14

Rosnow, R. L. Inside Rumor. A personal Journey. Meeting of the Eastern Psychological Association (1990, Philadelphia, Pennsylvania) American Psychologist. 1991, Vol, 46, 484–496.

Schachter, S., & Burdick, H. A field experiment on rumor transmission. Journal of Abnormal and Social Psychology. 1955, 50, 363–371

Shibutani, T. Improvised news : A sociogical study of rumor. 1966., 広井，橋本，後藤訳　流言と社会　東京創元社，1985

高木廣文　HALBAU-4　マニュアル　現代数学社，1994

Treaway, M. & McCloskey, M. Effects of racial stereotypes on eyewitness performance. Impications of the real and the rumores Allport and Postman studies. Applied Cognitive Psychology. 1989, 3, 53–63.

Walker, C. J. and Beckerle, S. The effect of state anxiety on rumor transmission. Journal of social Behavior and Personality. 1987, 2, 353–360.

Walker, C. J. & Blaine, B. The virulence of dread rumors : A field experiment. Language & Communcation. 1991, Vol. 11, 291–297.

柳井晴夫・高木廣文編著　多変量解析ハンドブック　現代数学社，1986

付　録

「エイズとうわさ」に関する調査結果

> 街で美しい女性に出会い，仲良くなった男はホテルでこの女性と一夜をともにした。翌朝目をさますと彼女はいなかった。バスルームへ行くと鏡に『WELCOM TO AIDS（エイズの世界へようこそ)』と真っ赤な口紅で書かれていた

Q 1　あなたは，この男がエイズにかかったとしたら，それは誰の責任だと思いますか

		非常にそう思う 1	2	3	どちらともいえない 4	5	6	全然そう思わない 7	NA
この男性自身に責任がある		45.0%	20.9%	10.0%	15.0%	0.9%	2.3%	2.7%	3.2%
	男性	35.7%	21.7%	10.4%	17.4%	1.7%	4.3%	5.2%	3.5%
	女性	55.2%	20.0%	9.5%	12.4%	0.0%	0.0%	0.0%	2.9%
相手の女性に責任がある		53.6%	11.8%	11.4%	13.2%	1.4%	0.9%	2.3%	5.5%
	男性	51.3%	11.3%	8.7%	15.7%	0.9%	1.7%	4.3%	6.1%
	女性	56.2%	12.4%	14.3%	10.5%	1.9%	0.0%	0.0%	4.8%

Q 2　あなたは，この「うわさ話」のようなことが本当にありうる話だと思いますか

	全体	男性	女性
1．ありうると思う	50.5%	51.3%	49.5%
2．まあありうると思う	34.5%	29.6%	40.0%
3．どちらともいえない	7.7%	8.7%	6.7%
4．あまりありそうでない	5.9%	7.8%	3.8%
5．ありそうもない	1.4%	2.6%	0.0%

Q 3　この「うわさ話」はあなたにどのていど関係があると思いますか。

	全体	男性	女性
1．自分とはまったく関係ない話である	26.4%	18.3%	35.2%
2．自分とはほとんど関係ない話である	35.9%	30.4%	41.9%
3．もしかしたら関係する話かもしれない	35.9%	47.8%	22.9%
4．自分と関係のある話だと思う	1.8%	3.5%	0.0%

Q 4　この「うわさ話」のように見知らぬ人との性行為がエイズ感染につながりとても危険だと思いますか

	全体	男性	女性
1．とても危険だと思う	68.6%	49.6%	89.5%
2．まあ危険だと思う	23.2%	38.3%	6.7%
3．どちらともいえない	5.5%	7.8%	2.9%
4．あまり危険だと思わない	1.4%	2.6%	0.0%
5．危険だと思わない	0.5%	0.9%	0.0%
6．NA.	0.9%	0.9%	1.0%

Q 5　つぎに「うわさ話」のこの女性についてのさまざまな見方があります。それらがどの程度あたっていると思いますか

	あたっている 1	2	どちらとも 3	4	あたっていない 5	NA
1．エイズをうつされたその仕返しをしている	41.8%	29.5%	22.3%	3.2%	2.3%	0.9%
2．やけになってエイズを広めようとしている	38.6%	24.5%	24.5%	5.9%	5.5%	0.9%
3．男性をからかって楽しんでいるだけ	18.6%	20.9%	29.5%	13.6%	15.9%	1.4%
4．彼女はいわば現代の「魔女」である	17.3%	13.2%	35.5%	9.5%	23.2%	1.4%
5．愛のない性行為を批判するため	8.6%	8.6%	30.0%	11.8%	39.5%	1.4%

Q 6　もしもこの男性があなただったら，病院にいってエイズ検査をうけますか

	全体	男性	女性
1．絶対に検査には行かないだろう	0.5%	0.9%	0.0%
2．自覚症状が出ないかぎり検査にはいかないだろう	12.3%	14.8%	9.5%
3．行くかどうか悩むが，自覚症状に関係なく検査にいくだろう	52.7%	47.8%	58.1%
4．すぐに検査に行って確かめるだろう	34.5%	36.5%	32.4%

Q 7　あなたがこの話の当事者だったら，その後の性行為は‥

	全体	男性	女性
1．それまでとまったく変わらないだろう	1.8%	3.5%	0.0%
2．気にはするがそれまでと変わらないだろう	6.8%	7.8%	5.7%
3．はっきりと感染していないことが分かるまでかならず予防措置をするだろう	35.9%	39.1%	32.4%
4．はっきりと感染していないことが分かるまでひかえるだろう	55.0%	48.7%	61.9%
5．NA.	0.5%	0.9%	0.0%

Q 8　上に示した「うわさ話」を聞いたり，読んだりしたことがありますか

	全体	男性	女性
1．ある	50.0%	45.2%	55.2%
2．ない	48.6%	53.0%	43.8%
3．NA.	1.4%	1.7%	1.0%

（ある人だけ）どのようなメディアを通してですか

	(N=220)	男性	女性	(N=110)
1．人の話	32.3%	27.0%	38.1%	64.5%
2．テレビ	17.3%	15.7%	19.0%	34.5%
3．ラジオ	3.2%	4.3%	1.9%	6.4%
4．新聞	4.1%	4.3%	3.8%	8.2%
5．週刊誌・雑誌	23.6%	23.5%	23.8%	47.2%
6．単行本	0.5%	0.9%	0.0%	0.9%
7．パンフレット	0.5%	0.0%	1.0%	0.9%
8．その他	0.9%	1.7%	0.0%	0.9%

Q 9　上にあげたような「うわさ話」を含めて，エイズに関するうわさ話を聞いたり，読んだり（週刊誌など）したことがこれまでにありますか

	全体	男性	女性
1．ある	68.2%	63.5%	73.3%
2．ない	31.8%	36.5%	26.7%

SQ 1　ではエイズに関するうわさ話を知った時のことをお聞きします

A. それは「人」から直接聞いたのですか

	(N=150)	男性	女性	(N=220)
1．はい	52.0%	46.6%	57.1%	35.5%
2．いいえ	46.0%	52.1%	40.3%	31.4%
3．NA	2.0%	1.4%	2.6%	1.4%

それはいつごろのことですか

	(N=78)	男性	女性
1．一週間以内	1.3%	2.9%	0.0%
2．この一月以内	5.1%	5.9%	4.5%
3．半年以内（9月以降）	46.2%	41.2%	50.0%
4．それ以前	46.2%	47.1%	45.5%
5．NA.	1.3%	2.9%	0.0%

それは誰からですか

	(N=78)	男性	女性
1．親しい同性の友人	37.2%	41.2%	34.1%
2．親しい異性の友人	7.7%	2.9%	11.4%
3．家族	6.4%	0.0%	11.4%

4．兄弟姉妹	0.0%	0.0%	0.0%
5．同性の知りあい	14.1%	11.8%	15.9%
6．異性の知りあい	7.7%	5.9%	9.1%
7．世間話で	35.9%	41.2%	31.8%
8．その他	3.8%	2.9%	4.5%
9．NA.	2.6%	2.9%	2.3%

B. ではテレビを通して聞きましたか

	(N=150)	男性	女性	(N=220)
1．はい	52.7%	50.7%	54.5%	35.9%
2．いいえ	34.7%	34.2%	35.1%	23.6%
3．NA.	12.7%	15.1%	10.4%	8.6%

それはいつごろのことですか

	(N=78)	男性	女性
1．一週間以内	7.6%	13.5%	2.4%
2．この一月以内	7.6%	8.1%	7.1%
3．半年以内（9月以降）	55.7%	51.4%	59.5%
4．それ以前	25.3%	21.6%	28.6%
5．NA.	3.8%	5.4%	2.4%

それはどんな番組のなかですか

	(N=78)	男性	女性
1．ニュース・解説	63.3%	64.9%	61.9%
2．ワイドショー	38.0%	37.8%	38.1%
3．ドラマ	0.0%	0.0%	0.0%
4．その他	6.3%	5.4%	7.1%

SQ 2　あなたはこのうわさを知ってから人とこの話しましたか（N=150）

	全体	男性	女性
1．話した	52.7%	41.1%	63.6%
2．話していない	47.3%	58.9%	36.4%

SQ 3（SQ 2で「話した」人だけ答えてください）

このうわさを誰と話しましたか

	(N=79)	男性	女性
1．親しい同性の友人	70.9%	83.3%	63.3%
2．親しい異性の友人	22.8%	26.7%	20.4%
3．家族	26.6%	16.7%	32.7%
4．兄弟姉妹	6.3%	0.0%	10.2%
5．同性の知り合い	15.2%	10.0%	18.4%
6．異性の知り合い	16.5%	16.7%	6.3%
7．世間話で	27.8%	26.7%	28.6%

何人ぐらいに話しましたか

	(N=79)	男性	女性
1．一人	1.3%	0.0%	2.0%
2．二―三人	51.9%	46.7%	55.1%
3．四―五人	24.1%	30.0%	20.4%
4．それ以上	20.3%	23.3%	18.4%
5．NA.	2.5%	0.0%	4.1%

それは聞いてからどのくらいたってからですか（N=79）

	全体	男性	女性
1．聞いたその日の内に	20.3%	3.3%	30.6%
2．2―3日たってから	24.1%	13.3%	30.6%
3．1週間ぐらい	32.9%	50.0%	22.4%
4．1ヵ月ぐらい	15.2%	20.0%	12.2%
5．それ以上たってから	7.6%	13.3%	4.1%

Q 10　あなたはつぎのようなエイズに関連する話や「うわさ」を聞いたり話したことがありますか

	全体	男性	女性
1．有名な芸能人××が実はエイズであるといううわさ	78.6%	73.0%	84.8%
2．あなたの身近な知り合いがエイズの検査に行ったといううわさ	24.5%	23.5%	25.7%
3．あなたの身近な知り合いがどうもエイズらしいといううわさ	5.5%	6.1%	4.8%
4．あなたの身近な知り合いの死因はエイズだったといううわさ	3.6%	3.5%	3.8%
5．エイズは世間で言われている（公的機関などの発表）よりも感染しやすいという話	25.5%	24.3%	25.7%
6．エイズは世間で言われている（公的機関など）ほど簡単に感染するものではないという話	49.1%	44.3%	54.3%
7．エイズの感染者は政府の発表よりかなり多く，すでに蔓延しているという話	75.0%	73.9%	76.2%
8．エイズの発生源にかんする話	63.6%	67.0%	60.0%

Q 11　あなたはエイズに関してどの程度知識を持っていると思いますか

	全体	男性	女性
1．持っている	4.1%	5.2%	2.9%
2．まあ持っている	42.3%	40.9%	43.8%
3．どちらともいえない	29.1%	32.2%	25.7%
4．あまり持っていない	23.2%	20.9%	25.7%
5．持っていない	0.9%	0.9%	1.0%
6．NA.	0.5%	0.0%	1.0%

Q 12　あなたはエイズに関する記事や本を読んだり，講演などに参加したりしたことがありますか。該当するものにいくつでも○をつけてください

	全体	男性	女性
1．単行本	2.6%	1.7%	3.8%
2．週刊誌の記事	60.9%	57.4%	64.8%
3．新聞の記事	56.8%	60.0%	53.3%
4．テレビの番組	67.7%	60.9%	75.2%
5．ラジオの番組	4.5%	7.0%	1.9%
6．講演会	1.4%	1.7%	1.0%
7．パンフレット	16.4%	12.2%	21.0%
8．その他	3.2%	0.9%	5.7%
9．NA.	9.1%	9.6%	8.6%

Q 13　エイズは自分さえ注意していれば感染を防げる病気だと思いますか

	全体	男性	女性
1．防げる	18.2%	24.3%	11.4%
2．まあ防げる	38.2%	34.8%	41.9%
3．どちらともいえない	28.2%	28.7%	27.6%
4．あまり防げない	5.9%	6.1%	5.7%
5．防げない	9.1%	6.1%	12.4%
6．NA	0.5%	0.0%	1.0%

Q 14　あなたは，エイズに関するさまざまな情報にどの程度信頼をおいていますか

	信頼できる		どちらとも		信頼できない	
	1	2	3	4	5	NA
1．世間を流れる情報	2.3%	9.1%	48.2%	18.2%	21.8%	0.5%
2．週刊誌の情報・記事	2.7%	14.5%	50.0%	20.0%	12.3%	0.5%
3．新聞の情報・記事	22.7%	41.4%	27.3%	5.9%	2.3%	0.5%
4．テレビ番組の情報	16.4%	31.4%	40.0%	8.2%	3.6%	0.5%
5．政府の公報誌の情報・記事	37.7%	39.1%	19.5%	1.4%	1.4%	0.9%
6．地方自治体のパンフなどの情報	34.1%	40.5%	21.8%	1.8%	0.9%	0.9%

Q 15　あなたはエイズは感染しても治療可能な病気だと思いますか

	全体	男性	女性
1．そう思う	3.6%	6.1%	1.0%
2．まあそう思う	8.6%	7.8%	9.5%
3．どちらともいえない	15.5%	19.1%	11.4%
4．あまりそう思わない	30.9%	27.0%	35.2%
5．そう思わない	40.9%	40.0%	41.9%
6．NA.	0.5%	0.0%	1.0%

Q 16　近い将来（4―5年のうち）にエイズ治療薬が開発されそうだと思いますか

	全体	男性	女性
1．そう思う	16.4%	19.1%	13.3%
2．まあそう思う	25.9%	18.3%	34.3%
3．どちらともいえない	24.5%	27.0%	21.9%
4．あまりそう思わない	19.1%	20.0%	18.1%
5．そう思わない	13.6%	15.7%	11.4%
6．NA.	0.5%	0.0%	1.0%

Q 17　あなたは，エイズに感染するのではという不安をもっていますか

	全体	男性	女性
1．強い不安を持っている	1.4%	0.9%	1.9%
2．不安を持っている	22.7%	20.9%	24.8%
3．どちらともいえない	25.5%	30.4%	20.0%
4．あまり不安ではない	34.5%	33.0%	36.2%
5．まったく不安ではない	15.9%	14.8%	17.1%

Q 18　からだの調子などをくずした時に，ふとエイズに感染しているのではないかと思うことがありますか

	全体	男性	女性
1．よくある	0.5%	0.9%	0.0%
2．たまにある	7.3%	9.6%	4.8%
3．1―2回ある	12.7%	12.2%	13.3%
4．まったくない	79.5%	77.4%	81.9%

Q 19　エイズはあなたにとってどの程度切実で身近な問題だと思っていますか

	全体	男性	女性
1．とても切実である	7.7%	9.6%	5.7%
2．まあ切実である	21.4%	22.6%	20.0%
3．どちらともいえない	24.1%	25.2%	22.9%
4．あまりそう思わない	33.6%	27.8%	40.0%
5．そう思わない	13.2%	14.8%	11.4%

Q 20　次にエイズに関連する不安が書かれています。どの程度そのように感じますか

	強く思う 1	そう思う 2	まあそう思う 3	あまり思わない 4	NA
1．注射や輸血でうつるかもしれないおそれ	50.5%	27.3%	14.5%	7.7%	0.0%
2．他人に知らないうちにうつされるおそれ	10.5%	20.5%	19.1%	49.5%	0.5%
3．エイズにかかったかどうかはっきりしないおそれ	10.5%	15.5%	28.2%	45.0%	0.9%
4．エイズにかかると死にいたるおそれ	51.4%	26.4%	11.4%	10.9%	0.0%
5．エイズにかかると周囲の人から隔離されるおそれ	43.2%	33.2%	13.2%	10.0%	0.5%
6．エイズにかかると周囲の人から差別されるおそれ	48.6%	31.8%	13.2%	5.9%	0.5%
7．エイズにかかると仕事をうしなうおそれ	41.4%	27.3%	20.0%	10.5%	0.9%
8．世間に知られると家族が恥ずかしい思いをする	45.0%	28.2%	15.9%	10.0%	0.9%

Q 21　あなたは，エイズ患者に対する様々な援助活動にどれだけ共感できますか

	強く共感 1	2	3	どちらとも 4	5	6	全く共感できない 7	NA
血液製剤による患者	70.5%	14.1%	7.3%	7.3%	0.0%	0.5%	0.5%	0.0%
異性愛による患者	14.1%	20.0%	16.8%	38.2%	4.1%	2.3%	4.1%	0.5%
同性愛による患者	9.1%	12.3%	9.5%	31.4%	10.5%	9.1%	17.7%	0.5%

Q 22　あなたはつぎの意見にどのように思われますか

	あたっている 1	2	どちらとも 3	4	あたっていない 5
A. 人が仕事をうまくこなすのは能力により運は関係ない	3.2%	14.1%	29.5%	24.1%	29.1%
B. 人生での成功は運にめぐまれるかにかかっている	9.5%	34.1%	40.5%	11.4%	4.5%
C. 日常の生活の中での不幸なできごとは運の悪さによる	4.5%	17.3%	47.7%	19.1%	11.4%

F 1　あなたの性別は

1．男性	115	52.3%
2．女性	105	47.7%
合計	220	100.0%

F 2　あなたの年齢は

	全体	男性	女性
1．15—19歳	0.9%	1.7%	0.0%
2．20—24歳	25.5%	17.4%	34.3%
3．25—29歳	26.4%	33.0%	19.0%
4．30—34歳	29.5%	29.6%	29.5%
5．35—39歳	17.7%	18.3%	17.1%

F 3　あなたのお仕事は

	全体	男性	女性
1．学生	2.7%	2.6%	2.9%
2．会社員	81.8%	89.6%	73.3%
3．公務員・教員	1.4%	1.7%	1.0%
4．会社役員・会社経営者	1.4%	2.6%	0.0%
5．商工自営	0.5%	0.9%	0.0%
6．農林漁業	0.0%	0.0%	0.0%
7．自由業	0.9%	0.9%	1.0%
8．専業主婦	5.5%	0.0%	11.4%
9．パート・アルバイト	4.1%	0.0%	8.6%
10．無職	0.0%	0.0%	0.0%
11．その他	1.4%	1.7%	1.0%
12．NA.	0.5%	0.0%	1.0%